平成２８年度　第６回政策討論会第二分科会要点記録

■　日　時　　平成２８年１２月１９日（月）　午前１０時～１１時１０分
■　場　所　　第一委員会室
■　出席者　　座長　　雪本　清浩
　　副座長　池内　矢一
　　澤田　和代
　　松本　妙子
　　池田　啓子
　　中井　良介
　　岸田　厚
　　稲田　悦治
■　欠席者　　井上　孝三郎

テーマ「地場産業の発展について」

【各座員による討論】

- 岸和田における地場産業がこれと言って、特定できない中、地元で行われている産業全般をどれだけ支援するかという意味で、市が策定した「岸和田市産業新戦略プラン」による戦略の柱を着実に実行することが必要である。
- 岸和田市での方策について
  産業振興の方策として企業誘致がよくいわれ、市もとりくんでいるが、「シャープの亀山」のように、雇用は派遣社員でリストラがあり、用がなくなれば撤退する。しかし、市内中小企業は不況でも雇用を守るために努力している。ここは市内に今ある中小企業の振興に、市の産業政策の重点を置くことが必要だと思う。
- １９８０年代の岸和田は、市内就業者（市内事業所への市内在住者の割合）が６０％で、府下でトップクラスだった。事業所の収益と就業者の所得は税収となり、市内での消費とあわせて経済の市内循環がおこなわれた。しかしその後の国際的な価格競争の荒波の中で、事業所数も就業者数も半減し、２０１０年には市内就業者率は４５％に落ち込んでいる。市の中小企業振興条例を生かして、市内産業の振興に取り組んでほしいと思う。
- 方策の一つとして、市内全事業所の調査をやってみたらどうか。事業所の話を聞けば、その得意分野、困っていることがわかり、政策課題も見つかり、

事業所に意欲を持ってもらうことにもなるのではないか。かつて（１９９９年）に東大阪市で実施したことが参考になる。この調査が土台となって産業政策が立てられた。その後何人も市長が替わったが、政策にぶれはないという。

- 地場産業の発展というテーマは私には重く感じるものです。この場で一言で言えるものなら、すでに事業者や団体、関係行政部局が方向を示し進めていると思われます。
  自分で考えられる範囲で言えることは、以前の討論のときも、話していると思うので、重なるが、多くある岸和田ブランドを、その業種の全体の商品・製品として岸和田全体の名産・名物にして岸和田の産業の発展につなげていけるのではないかと思う。農業でも漁業でも・・・。
- 海，川、山と自然の豊かさの中で、農産物では桃、ぶどう、いちじく、キウイなどのフルーツ、たまねぎ、水ナス、人参などのブランド化できる野菜、漁業ではいずみタコ、あなご、シラスなどの水揚げ量が多い。
  これらの素材を使っての商品開発やメニュー作りに力をそそぐ。
  それを、飲食店、高速のインターチェンジや道の駅、愛彩ランドなどで名物として、売り出す。
  これには準備として、みんなが協力連携をする必要がある。
  ①、商品開発、メニューづくりを→試食品評会（コンクール形式）→金賞発表
  ②、産業高校による高校生による食堂があればそこを発信基地にして売り出す。岸和田市内の高校や近畿ポリテックカレッジなどで、ﾒﾆｭｰとして食べてもらってアンケートをとるなど。若い人の好みや味をさぐる。
  ③、一品代表メニューが決まれば、大きく宣伝し、飲食店にも協力してもらう。
- 伝統工芸としての桐たんすは生活様式も変わり、タンスではなくてクローゼットに入る。
  サイズの引き出しなど変化させ、桐タンスの湿気と火につよい特性をＰＲする。
- 泉州の品質のよい竹をなんとか商品や建材に使えないか。また新たな製品開発は。
  竹材を扱う店舗にお伺いし話をききました。「竹は使い道が限られていて、庭の生垣や、建材に使われていたが今は竹に見える樹脂にかわり、活躍の場があまり見込めない。とのこと。
  竹バイオマスで、ストーブやビニールハウスの暖房燃料としての開発も期待される。

マイナスをプラスにできる方策を考えていく。

- 販路と宣伝は市をあげて、みんなですることが大事。
  互いの協力、連携なしにはこれからの産業は成り立たないと考える。
- 行政として、連携、宣伝、資金などで支援。
  起業家や発案する意欲が湧く取り組みをしていく。
- まず、個人的な偏見かもしれませんが、市内商工業には危機感が希薄であると思っている。取り敢えず、いま喰っていけてるから、明日も大丈夫やろうという意識でいるのではないかと思っている。やはり、行政が市内商工業の発展を願い政策を提案しても、肝心の商工業自身が何かやってくれるんやったら、やってもらおかでは、進まない。もっと危機感をもって積極的に、商工業から行政に対して、こうやってくれとか注文をつけるようにならない限り、発展は望めないように思う。市内商工業の積極的な取り組みにきたいするが、一方、行政の対応はどうかといえば、やはり積極的とは言い難い。以前にもお話ししたように、岸和田ブランド認定事業においても、認定するだけで、次の一歩・一手がないのではないか。行政としての後押し、販路拡大・売上向上対策や企業と企業とのマッチング等々・・・。
  では行政として、市内商工業のリサーチをどこまでしていけるか。例えば、以前にもお話ししましたが、『鉄人 28 号』で鉄板を曲げる高度技術を有する北海鉄工の外にも、臨海に日本ラスパートという企業があるが知名度はない。主にアジアを中心に輸出し、又は大手国内企業との取引をしているようで、岸和田市内でも知名度はないと思う。この企業はステンレス釘ではコストが高くなり、鉄釘はコストが低く調達できるものの、直ぐに錆びてしまう。鉄釘に特殊な塗料を塗布し加工することで、ステンレスよりはるかにコストが低く調達でき、錆びない釘を製造している。有名なスカイツリーにはその加工技術を使った、金物が多く使用されているのである。
  通常の大阪府などからの商工業リサーチ調査のみならず、岸和田独自の詳細な調査が必要であるとともに、適切・的確なアドバイスできるスタッフの確保と体制づくりが必要であると思う。
- 農家に嫁いだ婦人にお会いし、お話を聞かせていただきました。「最初は慣れない仕事で、大変だと思った時もありましたが、今は仕事をいきがいとしている自分に気が付きました。」と。軽四自動車に大根、白菜、玉ねぎ、ホウレンソウ、など、いつも野菜を積み、車で走っておられます。亡きおじいさんが永年、農業委員をされていて、今でも田畑を減らすことなく、農業に勤しんでおられる姿はとても周りの人にも交換を持たれている。このほど、彩誉にんじんと岸和田で作った味噌をコラボした「彩誉にんじんドレッシング」を開発され、これが「岸和田ブランド」に認定され、評判になっている。

今は、１０人ぐらいの方と一緒にドレッシングを作っていますが、あまり売れすぎると生産が追い付かないと笑って語っておられました。女性がいきいきと、自分たちのアイデアで試行錯誤しながら、岸和田独自の農業発展のために努力されている姿に感激しました。

- 回を重ねるごとに、このテーマが難しいなと今感じています。
  前回、民間の力で町おこしに成功した先進事例を紹介したところ、岸和田にも「岸和田シティプロモーション推進協議会（ＫＣＰ）」があると聞きました（平成２８年５月設立、会員は岸和田の市民、企業など２５人、キャッチフレーズは「まちへの思いがまちを動かす」）。Ｈ２９年３月５日にはマルシェにてイベントも計画しているようです。
- 『元気な岸和田』を目標に、強い経済・強い財政・強い社会保障を確立しなければならないと考える。その為には、農林水産商工の連携を強化し
  その上で生産、加工、流通までを一体的に担う６次産業化に取り組むべきであると思う。
- 【農業】においては、現在栽培されている桃・水茄子・玉葱・葱を生かし①生産基盤の整備②生活環境の整備③防災減災と維持管理を進めなければならない。
- 【水産業】においては、シラス・蛸・穴子・蝦蛄を使った商品開発を進め漁業と養殖業を如何に発展させていくかがカギとなると考える。また、消費拡大をどの様にするか大きな問題である。
- 【商工業】においては、各産業の商品の合体を図るため、同業者の集積とオーガナイザーの発掘が重要である。オーガナイザーについては、市外からの人材又は企業も検討することが必要であろう。

【次回に向けて】

平成２９年１月２３日（月）　午後３時～

※ 第７回政策討論会では、岸和田市として『地場産業の発展』がどうあるべきか、また、どの様に発展させていくかについて再度討論する。

以上